

お名前	性別	終戦時の年齢	現住所
小林 芳春 よしはる よしはる	男性	12歳	新城市八束穂

この記録は平成24年8月に東愛知新聞社が企画した戦争体験記録、「その時私は小学6年生」に寄稿されたものです。

「8月15日が近づく」

「大本営発表」の文字が何よりも幅を効かせていたあの時代に、子ども心に不安を感じたのは「転身」の文字でした。「折角そこまで進出したのに？」「連日、大戦果をあげている（報道）のに？」と思うと、合点のいかない何かが残りました。それからまもなくの「アッツ島の日本軍玉砕」は「敗退」でしたが、「一億戦意は微塵も衰へず」といわれると、「そうありがたい」と本心思いました。

19年に入ると、サイパン島・グアム島の玉砕が続き、敗戦は明らかでしたが、口にすることはありませんでした。友人たちとこんな話をしていました。

- ・友人の長兄はニューギニア戦線で高射砲隊の指揮をしていて、米機の直撃弾を受け戦死した。その頃、母は枕元に立った兄の姿（夢？）を見た。
- ・猛スピードでB29の編隊に突っ込み、次の瞬間鳳来寺方面に落ちていったあの戦闘機の飛行士は、「何歳だと思う？」
- ・「君、今度の『若櫻』（陸軍の少年向け雑誌）2月号を見た？」
- ・学童服の配給に当たった。透かしてみると向こうが見えた。

「この色はカラムシ*1だよな。」

昭和20年8月15日、私は弟が赤痢の関係で家にいましたが、友人のM君は、その日も豊島の河原を開墾するために竹槍を持って出掛けました。開墾の合間に竹槍で敵を刺す練習をし、作業が終わって帰り際、先生から「正午に重大放送がある」と言われました。帰る途中、雑貨屋の前で放送を聞きましたが、ラジオの調子が悪いのか、何を言っているのか分からなかったと言います。（Mは国分寺市の森谷信男君）

でも、その時、戦争が終わりました。



「若櫻」 20年2月号表紙

*1 カラムシ 高さ1m前後の比較的大型の多年草。「麻のような繊維」を意味し、茎（カラ）を蒸して繊維をとったことから「カラムシ」となったというのが一般的です。